

2分の1拍子

井口昭久

病院へ2カ月近く入院して、退院後大学へ出かけた。私の研究室は研究棟の7階にある。1階には受付があり長年の馴染みの女子事務員がいた。「先生！お久しぶりです。お体は大丈夫ですか？」

私は真面目な顔をして訊ねた。「つかぬことをお伺いしますが、私の研究室は何階でしたでしょうか？」。「先生！7階ですよ、7階！」と言って、左手の指を5本と右手の指の2本を私の目の前にかざして教えてくれた。私は大学付属のクリニックで患者を診ていた。そのクリニックへも久しぶりに顔を出した。精神科の外来はいつもは忙しいのだが、

思っちゃった」

精神科医師…「先生、突然変なこと言わないでくださいよ。本当かと思っちゃった」

どちらもハンパク遅れであった。

70歳になる前に、自動車の高齢者講習を受けると警察から通知が来た。

その講習を受けないと免許証がもらえないらしい。そこでは私が認知症であるかどうかテストを受けることになる。

「ここはどこですか？」と聞かれた時に、「どこでしょう」と冗談を言うと認知症にされてしまうらしい。

「100引く7は？」と聞かれて考え込むふりをする、「そろそろ始まったか」と推測されて備考欄に何か書かれるかもしれない。そういう年齢になったらしい。

高齢者とは他人事だと思っていたが自分のことになってきた。

高齢者を話題に載せて生活してきたが、今後は私の方が、老年医療をやっている医者の方

その日は暇そうであった。

私はノックして診察室へ入っていった。そこで「つかぬことを伺いますが、私の研究室はどこでしたっけ？」と言った。

事務職員も精神科の先生もどちらも、「井口先生が、自分の研究室の所在が分からなくなつた」と一瞬思つたらしい。

人の会話は連続するか、一拍子休みのテンポで続くのが普通である。しかし二人とも半拍子遅れて言った。そのテンポの遅れは動物的な反射にかかる時間で、その人の心の真実を表している。

女子事務員…「やだ先生、いよいよダメかと



飯の種になる運命だ。

世間は私のことを老人と思つていられるらしいことに気が付くと、服装に無頓着になつた。いつもはクリーニングに出していたのだが、その日はしわしわのワイシャツを着て出勤してみた。気持ちがいよれよれになり、みすぼらしい老人になつた気分になって、声もしわがれてきた。世間の目に自分を合わせると、しみじみと惨めになるようだ。

今後は服装をシャキつとして、皺のないワイシャツを着て、「つかぬ事を伺いますか？」を続けることにしよう。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)